

# ハイブリッド作家の児童文学における挑戦 ——E. ポーリン・ジョンソンの『シャッグナッピ』を中心に——

荒木陽子

## はじめに

近年カナダでは、ポストコロニアリズムならびにフェミニズムの観点から、19世紀後半から20世紀初頭に活躍した詩人、作家、パフォーマー、E. ポーリン・ジョンソン (Emily Pauline Johnson, 1861-1913) に関する研究が活発になっている。20世紀後半のカナダ文芸ナショナリズムの時代、ジョンソンはチャールズG.D. ロバーツ (Charles G.D. Roberts, 1860-1943) その他のポスト・コンフェデレーション時代の男性作家に比較して注目されることが少なかった。しかし、ジョンソンの病没から100年を経た2013年のカナダでは、彼女の名前を目にすることが多い。例えば2013年3月には、彼女の生誕地オンタリオ州のシックス・ネイションズ居留地 (Six Nations Reserve) から遠くないハミルトン (Hamilton) にあるマクマスター大学 (McMaster University) が、「E. ポーリン・ジョンソン・シンポジウム：彼女の人生、作品、そして遺産」(E. Pauline Johnson: Her Life, Work and Legacy Symposium) と彼女の遺品の記念展示を行い、<sup>(1)</sup> 同年7月にはカナダ放送協会 (Canadian Broadcasting Corporation) が、マーガレット・アトウッド (Margaret Atwood, 1939) 初のオペラ作品がジョンソンの生涯をテーマに完成し、シティ・オペラ・ヴァンクーヴァー (City Opera Vancouver) により2014年5月に上演されることを報道している。<sup>(2)</sup> 特に後者について、アトウッドがカナダ文芸ナショナリズムの最盛期に出版した『サヴァイヴァル』(Survival 1972) には、索引にジョンソンの名前すらないことを考えると、文学潮流が大きく変化したことがわかる。<sup>(3)</sup>

このような状況下でジョンソンの少年向け短編小説集『シャッグナッピ』(The Shagganappi 1913) の再評価は滞ったままだ。カナダにも多くの読者を抱えたアメリカの少年向け雑誌『ボーイズ・ワールド』(Boys' World) に20世紀初頭に掲載された短編小説を中心にまとめた同書は、リサイタル業から引退したジョンソンがアメリカ市場向けに量産した商業的作品としてとらえられるためか、その芸術的、文化的意義を問われることは少ない。<sup>(4)</sup> 本稿は第一にモホーク族の父とイギリス系の母のもとに誕生したジョンソンの背景を確認した後、彼女の人種的・文化的背景を自在に往来するトリックスター性に着目し『シャッグナッピ』を読みたい。本稿におけるジョンソンが描く人種表象の検証

は、ジョンソンの人種表象に表れる矛盾が白人であると同時にモホーク族の女性でもあるジョンソンが自らの地位を自在に利用することにより、白人男性読者の持つステレオタイプをなぞりながらも、それと戦おうとするために生じるものである点を明らかにするであろう。

## 1. 『シャッガナツピ』 編纂まで：人種的・文化的背景とその影響

本稿は第一にポーリーン・ジョンソンの作品に強い影響を与えている彼女の人種的、文化的背景を確認したい。伝記作家ベティ・ケラー (Betty Keller) によれば、ジョンソンは常に自らを先住民と考え、特に十代の半ばで隣接する白人コミュニティ、ブラントフォード (Brantford) の学校に通うようになるとそれを明示するようになったという。<sup>(5)</sup> しかし予備知識の無い者が19世紀ヨーロッパ風の衣服をまとったジョンソンの写真を見ても、彼女が先住民であることはほとんど分からない。それは彼女の母親エミリー・スーザン・ハウエルズ・ジョンソン (Emily Susan Howells Johnson) に加えて、モホーク族のチーフであった父親ジョージ・ヘンリー・マーティン・ジョンソン (George Henry Martin Johnson) の母方の祖母もオランダ系の白人だからであろう。

ジョンソン家は文化的にもヨーロッパ化していた。イギリス生まれ合衆国育ちのエミリー・ジョンソンは中産階級の出自であったが、イギリス国教会宣教師の夫とシックス・ネイションズ居留地に移住した姉を追い、そこに移り住み、義兄の通訳であったジョージ・ジョンソンに出会った。<sup>(6)</sup> 西洋風の衣服に身を包み、ナポレオンを愛し、後に連邦政府の通訳となるジョージ・ジョンソンは当時からヨーロッパ化していた。彼の家族のヨーロッパ化は早く、遅くともジョージ・ジョンソンの父方の祖父ジェイコブ・ジョンソン (Jacob Johnson) の時代には既にキリスト教化していた。また、ジェイコブ・ジョンソンが現在の合衆国北部にあったモホーク族のテリトリーで生まれ、アメリカ独立戦争後にイギリス側のシックス・ネイションズ居留地に移住したこと、そして後にチーフとなるその子ジョン・スモーク・ジョンソン (John Smoke Johnson) も、1812年戦争においてイギリス側で戦ったことからわかるとおり、ジョンソン家はイギリス国王に忠誠を誓ったロイヤリスト (Loyalists) であった。言語的にも遅くともジョン・スモーク・ジョンソンは英語を話し、インディアン監督局の監督 (superintendent) と部族の仲介役を果たしていた。このような背景から、ジョージ・ジョンソンが1856年に妻に結婚のプレゼントとして送った邸宅チーフスウッド (Chiefswood) が居留地内にありながら、ヨーロッパ風の邸宅であることも理解できる。

グラント川に面するドアがカヌーでやってくる先住民を、ブラントフォードに向かう道

に近い対面のドアが白人客を迎えたチーフスウッドは、ジョンソン家の子供たちが二つの文化の中で育ったことを示す事例としてしばしば用いられる。<sup>(7)</sup>しかし、ポーリーン・ジョンソンが受けた教育はヨーロッパ系に傾いており、それは後に主として白人をオーディエンスとする彼女の活動に大きな影響を及ぼす。彼女が先住民子弟とともに居留地内で受けた学校教育はわずか2年で、主に自宅でイギリス系の母と家庭教師により教育された彼女は、後に白人師弟中心で居留地外にあるブラントフォード・コリジエート・インスティテュート (Brantford Collegiate Institute) に通った。また家庭での教育は読書中心で、12才までにウォルター・スコット (Walter Scott, 1771-1832) とヘンリー・ワズワース・ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807-1882) を読みつくしたジョンソンは、ロバート・ブラウニング (Robert Browning, 1812-1889)、アルフレッド・テニソン (Alfred Tenison, 1809-1892)、ジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824)、ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821)、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674) など英米の文学に親しんだという。<sup>(8)</sup>こうした豊かな英米文化教育の一方で、先住民文化教育は不足したため、彼女は居留地育ちにもかかわらずモホークの言語を流暢に話すレベルに達することができなかった。

ここにジョンソンの文化的・人種的背景をやや詳しくみたのは、それが彼女の創作およびパフォーマンス活動に大きく影響しているからである。彼女は詩から雑誌記事や短編小説等の散文へとその活動を変化させる点で、同世代のカナダ人作家と類似する。また自らの作品を「講演」した同世代のカナダ人作家としては、ブリス・カーマン (Bliss Carman, 1861-1929) も有名である。しかし、先住民性を搾取して「演出」を凝らし、長期間 (1892-1909) にわたり旅興行を続けたジョンソンの「公演」スタイルは、パフォーマンス的要素が強く極めてユニークである。

1892年1月にステージ・デビューを果たしたジョンソンは、同年秋からステージを二部にわけ、前半をロングフェローの『ハイアワサの詩』 (*The Song of Hiawatha* 1855) の主人公の妻ミネハハ (Minehaha) のイメージを元に創作した「先住民風」の衣装で、後半をヴィクトリアン調ロングドレスでパフォーマンスするという演出をはじめた。先住民風衣装の製作にあたって、彼女がW.D. ライトホール (W.D. Lighthall)、アーネスト・トンプソン・シートン (Earnest Thompson Seton, 1860-1941) やチャールズ・メア (Charles Mair, 1838-1927) など同郷の白人男性作家の意見や助けを得ながら材料を集めた点は特筆すべきであろう。この演出は二つの点で時代を反映するとともに、ジョンソンが主要オーディエンスである白人男性の持つ「先住民女性観」を演じていたことを示す。<sup>(9)</sup> 第一にヴェロニカ・ストロング・ボグ (Veronica Strong-Boag) とキャロル・ガーソン (Carole Gerson) がジョンソンの研究書、『パドリング・ハー・オウン・カ

ヌー』(*Paddling Her Own Canoe*)で解説するとおり、1890年代米国内の品評会や博覧会においては先住民の展示が人気を博していた。特に「バッファロー・ビル・コーディのワイルド・ウエスト・ショウ」(*Buffalo Bill Cody's Wild West Show*)に代表されるショー・インディアン興行の最盛期は、ジョンソンの興行の最盛期と重なる1894年から1903年の間である。ジョンソンはロングフェローらの構築した先住民表象に加えて、こうした興行で植えつけられた白人オーディエンスが持つ先住民観に訴えようとしていた可能性が高い。<sup>(10)</sup> 加えて、カナダにおいては1876年のインディアン法 (*Indian Act of 1876*) 施行以来先住民の同化政策がすすめられていたが、この文脈上では先住民風の衣装からヴィクトリアン調のドレスに着替える演出は、詩「あるインディアンの妻の叫び」(*"A Cry From an Indian Wife"*)に代表される、白人批判を行いながらも、白人に征服され消えてゆく先住民を描く題目との相乗効果により、オーディエンスに対して「主流カナダ社会に先住民が同化する過程を象徴」し得る。<sup>(11)</sup> そして、ジョンソンは主流社会に同化する「理想的な先住民」を演じることで、観客の期待に応えたのである。

このように先住民のステータスを持ち、それを自らのステージ・イメージ作りに利用したジョンソンは、経験に基づくオーセンティックな先住民イメージをそのまま再現したわけではない。彼女は自らの経験に白人の先住民観に訴える先住民像を合成し、あたらしい先住民像を創造して演じていたのである。前述のとおり、ジョンソンが早い時期から強い先住民アイデンティティを持っていたという指摘がある。しかし、筆者はそれを疑いジェンダーのパフォーマンスによる構築性を指摘するジュディス・バトラー (*Judith Butler*) のパフォーマンス・ヴィティ論を援用し、ジョンソンは自らが作りあげた先住民像を長年演じることによって、先住民意識を高めていったものと考えたい。<sup>(12)</sup> さらに筆者は先住民を演じることに加え、晩年の経済的困窮とパフォーマーとしての商品であった容姿の変化により、彼女が新たに獲得した「老いゆく貧しい独身女性」としてのアイデンティティが、同様に社会の周縁におかれる先住民としてのアイデンティティを相乗的に高めた可能性を指摘したい。<sup>(13)</sup>

イデオロギー的に矛盾するようと思われる複数のアイデンティティの獲得は彼女が先住民かつ白人であるという点にとどまらない。彼女はイギリスに忠誠を誓うカナダ・ナショナリストであり、職を得て経済的に独立をすることをめざし、生涯を独身ですごした「新しい女」(*new woman*)でもあった。フェミニストであり、先住民の権利を主張するものが、ロイヤリストであり、カナダ・ナショナリストであることは一見矛盾するようにも思われるが、本稿ではキャサリン・ベルジー (*Catherine Belsey*) が主張するように、アイデンティティを「時に相互矛盾する複数の主体ポジションのマトリックス」として実践されるものとしてとらえたい。<sup>(14)</sup>

『シャッガナッピ』は、こうしたアイデンティティが最終形となりつつあった晩年、彼女が生計をたてようと『ボーイズ・ワールド』に寄稿した短編小説をまとめたものである。同書は1909年にヴァンクーヴァーに定住してまもなく病床についたジョンソンをその収益で援助すべく、支援者たちが中心となり編集し、没後1913年に出版された。次章以降はこの『シャッガナッピ』に描かれる先住民像を分析し、第一にジョンソンが彼女のステージ・イメージづくり同様に、アイデンティティの一つである白人の文化リテラシーを利用することにより、原稿を売り、読者に読ませるための「白人の求める先住民像」や「白人に分かりやすいインディアン像」を構築している点を論じたい。そして、彼女が高度に定型化した商業文学の形式を研究し読者を引きつけながらも、同じ作品のなかに先住民、そして女性の地位向上をめざす主張やそれに伴う白人主流文化批判を織り込み、次世代をになう若い読者を教育しようとするアクティヴィストであった点を指摘したい。<sup>(15)</sup>

## II. 白人の求める先住民像を描く：白人文化リテラシーを生かして

キャロル・ガーソンはジョンソンの興行演目の約半分が先住民をテーマとする作品であったのに対して、彼女の詩全体のうち先住民をテーマとするものはわずかに一割に過ぎないことを指摘している。特にジョンソンは1894年に曾祖父のダゲヒーオンワゲ (Tekahionwake) という先住民名をE. ポーリーン・ジョンソンに追加表記するが、それ以前1885年から1893年までに当時のカナダの主流雑誌であった『ザ・ウィーク』(The Week) と『サタデー・ナイト』(Saturday Night) に出版した詩においては、同世代のコンフェデレーション詩人と称される男性詩人やその他女性詩人同様に、カナダの生活や風景、そして家庭生活をポストロマン主義的様式で抒情詩化しており、その先住民性を特に強調していたわけではない。<sup>(16)</sup>しかし、1906年以降に全ての作品が出版された『シャッガナッピ』において、先住民を登場人物、テーマとする作品が占める割合は6割を超えている。<sup>(17)</sup>先住民関連の作品増加の背景には、ジョンソンがこの時期までに長年の先住民パフォーマンス、そしてスコームッシュ族 (the Squamish) のチーフ、スアブラック (Su-á-pu-luck、英語名Joe Capilano) との出会いと交流などを通して、先住民意識を高めていたことがあるものと思われる。ただ先住民をテーマとする作品の増加の理由はそれだけではない。1903年6月に『トロント・グローブ』紙 (Toronto Globe) に掲載されたマジョーリー・ピクトホール (Marjorie Pickthall, 1883-1922) からジョンソンへのフィクション参入への呼びかけが示すとおり、この頃アメリカ合衆国では既にインディアンの伝承や伝説という分野が有望な「商品」となっていた。<sup>(18)</sup>当時のカナダで人気を博した作家であり、『ボーイズ・ワールド』にも寄稿していたピクトホールからの公開進言は、ジョンソンに影響を与えたに違いない。<sup>(19)</sup>

では、ここからは『シャッガナッピ』中の先住民を取り扱う物語で、ジョンソンが彼らをどのように表象しているか、まずは彼らの外見の表象から検証したい。第一に目立つのがジョンソンの人種ステレオタイプに訴える表現である。『シャッガナッピ』中の物語において、語り手はしばしば白人を「ペイルフェイス」(paleface) ないしは「ホワイトマン」(white man) と表現する一方で、先住民の登場人物を「レッドスキン」(redskin) や「レッド・レース」(red race) とよび、肌の色を元に二つのグループを二項対立で表現する。特に先住民との接触が少ない白人少年読者に対して、ジョンソンは先住民の容姿を詳細に説明する傾向があるが、その際必ずといってよいほど赤や銅色の肌や黒い髪や目に触れる。先住民が必ずしもこうした特徴をもたないことは、白人に近い容姿を持つジョンソン自身が認識していたはずである。アイヴズ・ゴッダード (Ives Goddard) が指摘する通り、先住民の肌色を「レッド」とする表現は、先住民が自らを指して使っていた表現が伝説からの重訳を通して英語に流入したものである。しかしこの表現は20世紀前半までには既に差別的な含みを持った表現として英語に定着していた。<sup>(20)</sup> それにもかかわらず、ジョンソンがこうした表現に訴えるのは、白人読者の先住民に対するステレオタイプにある程度まで寄り添うことにより、読みやすい物語を作り出すための手段と考えられる。

「レッド」と対立する表現、すなわちジョンソンが白人をステレオタイプ化する際に用いる「ペイルフェイス」という語に含まれる「ペイル」(pale) という表現は、『切れた弦』(“The Broken String”)<sup>(21)</sup> の病弱なバイオリン少年や『スカーレット・アイ』(“The Scarlet Eye”)<sup>(22)</sup> に登場する怪我をして先住民に助けられる少年に使用されている。また「デラウエア族の偶像」(“The Delaware Idol”)<sup>(23)</sup> では、この語が熊狩りのはずが熊にカヌーを転覆される白人に対して比較級で「今まで会ったいかなるペイルフェイスよりも色白」として使われる。<sup>(24)</sup> これらの例より白い肌色は文明化された白人の肉体・精神的「不健康さ」をあらわすのに使用されていることがわかる。

一方で先住民をあらわすのに使用される「レッド」という表現は、彼らの肉体・精神的な「健全さ」と結びつけられる。そして先住民の健全さを表現する際、野生動物の比喩が用いられることも指摘されるべきであろう。例えば「王様のコイン」(“The King’s Coin”)<sup>(25)</sup> のフォクス・フット (Fox-Foot)、「デラウエア族の偶像」のワムパム (Wampum)、そして「リトル・ウルフ・ウィロー」(Little Wolf-Willow)<sup>(26)</sup> の主人公はいずれもその俊敏さをリンクスに例えられている。その他にも、登場人物の賢さや注意深さをあらわすために狐、静かさや敵対心をあらわすために蛇の比喩が使われている。<sup>(27)</sup>

このようにジョンソンは白人を「文明」の、先住民を「自然」のドメインにおくことで、二項対立を作りあげる。『シャッガナッピ』に所収された物語では、「自然」に属する先住民との接触が「文明化」した白人を救うという図式がしばしば見られるが、それは前

出のブリス・カーマンに強く見られる自然と親しむことを通して中産階級の白人（特に男性）が文明社会で失われた精力を回復しようとする19～20世紀転換期の反近代主義の流れを喚起する。<sup>(28)</sup>しかし、エリザベス・ギャルウェイ（Elizabeth A. Galway）が示唆するとおり、この自然と先住民を結びつける傾向は、先住民を「文明」から遠い「非文明」に位置づけ、劣るものとしてとらえようとする白人の言説に他ならない。<sup>(29)</sup>

そして、『シャッグナッピ』では、しばしば白人を救う先住民が描かれる。白人探検家の森のガイドを勤めるフォックス・フット、居留地で宣教師やノース・ウエスト騎馬警察（North-west Mounted Police）の通訳をつとめるワムパムヤリトル・ウルフ・ウィロー、そして父は交易者のガイドを勤め、息子はその交易者の息子を水難から救う「シャッグナッピ」（“The Shagganappi”）のラローク（Larocque）親子、<sup>(30)</sup>「スカレット・アイ」においてプレーリーで怪我をした少年を助けるメディシン・マンのファイヴ・フェザーズ（Five Feathers）などはその例である。彼らは「文明」の中で白人と共生し、白人に忠実で役に立つ人物として描かれるが、前出のギャルウェイも論ずるとおり、同時に白人に先住民が奉仕するという服従関係を露呈する存在でもある。<sup>(31)</sup>

先住民と「非文明的」なイメージとの結びつきは、彼らの身体を包む服や装具、家、そして乗り物などのかたちでもあらわされる。ジョンソンはしばしば白人登場人物に近代的な家や乗り物、ヨーロッパ風の服を提供するのに対して、自らの経験に反して、先住民たちには伝統的な住居、民族衣装、そして馬か徒歩という移動手段を与える。そして二つのグループの違いは、二つの文化のコンタクト・ゾーンに最もよくあらわれる。例えば主人公が少しずつヨーロッパ風の衣服を着ることを強いられる「リトル・ウルフ・ウィロー」中の寄宿学校では、主人公の衣服の変化が彼の白人文化の習得と結びつけられている。また、列車がブラックフット居留地（Blackfoot Reserve）内で洪水のため停車したことをきっかけに、トロントの大学教授の息子ノートン・アラン（Norton Allan）が先住民の少年ノース・イーグル（North Eagle）の家で一夜を過ごす『『ノース・イーグル』との一夜』（“A Night with ‘North Eagle’”）の冒頭では、<sup>(32)</sup>「力強いエンジン」（“powerful engine”）を「唸らせ」（“throbbled”）、48時間の緊急停車にもかかわらず、乗客に快適な居住空間と食事を与えることができる大陸横断鉄道のプルマン寝台が、「現場宿舎」（“construction camp”）を思わせる平原に群れをなす原始的な先住民の住居ティーピー（“Tepee”）と明確な対比をなす。<sup>(33)</sup>そして二人の少年の父の容姿も、細くハンサムな顔を休暇中にもかかわらずきれいに剃り金縁めがねをかけた女性的なアラン教授と、<sup>(34)</sup>ぬきんでて背が高く肩を怒らせ伝統的な民族衣装に身を包み、教授に「なんと雄大な男っぷり！」と言わしめるチーフ・スリーピング・サンダー（Chief Sleeping Thunder）という対照的なかたちであらわされる。<sup>(35)</sup>そして、物語の最後に少年たちが友情の証として交換する各々の「上質

なシルクの青いシャツ」と「ボックスキンのシャツ」も好対照をなす。<sup>(36)</sup>

また、先住民の話す言語もステレオタイプ化されている。英語を話す白人登場人物が先住民の言語を話さないのに対して、先住民、特にその若者たちは英語を話し、必要な場合には大人たちと白人との間の通訳となる。しかし、彼らが白人との接触時に口にする英語はほとんどの場合、文法的に未洗練で単語を並べただけの「ピジン英語」として描かれている。前文で「ほとんどの場合」としたのは、「シャッグナッピ」の主人公であるシャッグナッピ、リトル・ウルフ・ウィロー、ワムパムのように、洗練された英語を話す場合があるからである。そして、こうした例外は、先住民がワムパムのように宣教師と接触すること、シャッグナッピやリトル・ウルフ・ウィローのように先住民向け寄宿学校や白人の学校で学ぶこと、そしてシャッグナッピやその友人のハルのように白人との混血がすすむことによってのみ起こる。これは先住民の主流カナダ社会への同化を促す当時の連邦政府の政策に沿う表現と考えられよう。

そして先住民の主流社会への同化は、ジョンソンの先住民の物語が全て過去形で伝えられることに示唆される。「『ノース・イーグル』との一夜」や「トーテム・ポールのフールール」(“Hoolool of the Totem Poles”)に見られる、先住民を研究対象とする白人、先住民の道具等を買取る白人、ならびにそうして収集された先住民の所有物が白人のコレクションに収められている様子は、<sup>(37)</sup>先住民の文化が同時代を生きる脅威ではなく、既に制圧され安全な歴史となったことを強調する。<sup>(38)</sup>それと呼応するのが「ブラザーフッド」(“The Brotherhood”)のクィータ(Queetah)や「シャドウ・トレイル」(“The Shadow Trail”)のピーター・オッターテール(Peter Ottertail)という年老いた先住民が白人の少年に先住民の伝承や、かつての戦いの物語を聞かせるという劇中劇を含む物語である。<sup>(39)</sup>特に宣教師のお気に入りのピーター・オッターテールがクリスマス・イヴの夜に牧師館で白人の少年たちに、先住民化されたキリスト降臨の物語を語るという筋書きは、先住民のキリスト教化を示す。そしてこれら二つの物語に見られる語りの戦略は、先住民とその文化を白人の後進に道を譲り「消えゆくもの」として描くことを可能にすると同時に、「消えゆくもの」の持つロマンティシズムに物語を支配させることにより、先住民文化の衰退を引き起こした白人側の暴力を隠蔽する。

このように、ジョンソンは白人が先住民に対して持つステレオタイプを利用し、隣人として安全な先住民を描くことで、少年読者が安心して異文化の持つエキゾチシズムを堪能するとともに、そこで冒険することができる作品を提供する。そしてこのような試みは、ジョンソンが白人の文化的約束事とともに北米の先住民が置かれる状況にも通じているからこそ可能になるといえよう。人種的に白人化がすすみ、英語を御し、白人文化マトリックスを熟知したうえで、本章でみたような物語を書くことができるジョンソンは、彼女が



ステージ上で演じる先住民同様に、同化政策を推し進める主流社会にとって理想的な「先住民」であり、便利な宣伝塔であったのではないか。<sup>(40)</sup> またそうであるからこそ、1896年から1911年の長期にわたりカナダの首相を務めたウィルフリッド・ローリエ (Wilfrid Laurier) とその婦人は、彼女のリサイタルをホストし (1893, 1900)、国内外の有力者に紹介状を書いたのであろうし、先住民との問題を抱えていたヴァンクーヴァー市においては彼女の葬儀が白人が主導し先住民も参加する公葬として執り行われたのであろう。<sup>(41)</sup>

### III. 白人少年に伝えたい先住民像と白人文化批判

しかしながら、前章で確認した先住民を取り扱う作品の増加、ならびに前章で確認した白人読者に受けいれられやすい先住民イメージの利用は、単に長年の活動を通してオーディエンスに対して「理想的な先住民」のイメージを強く印象付けていたジョンソンが、自らのイメージを利用して生活の糧を確保しようとしていただけではない。本章における更なる検証は、先に見たとおり白人の言説に迎合するかのように見える作品の中で、実はジョンソンが先住民独自の文化を肯定し、彼らの権利、主張を織り込むことに成功していることを明らかにする。ジョンソンは、先住民を白人の言説上で白人に対立する価値観を持つ人物としてネガティブに他者化することもある。しかし、彼女はその過程で生成されるステレオタイプ化された白人像に、自己批判を展開させるのである。

ジョンソンが提示した先住民と自然を結びつけるステレオタイプは、先に論じたとおり先住民を「非文明」に位置づける点で問題を孕む一方で、白人を否応なく「文明」の位置に置き、彼らの先住民の社会における「無能さ」を露呈し、先住民の相対的「有能さ」を印象づける。この時文明が白人に与えた立派な道具は、彼らの無力さを強調する装置となる。ここで前章で取りあげた白人に奉仕する先住民たち (ガイド、通訳、メディシン・マン) や窮地にある白人ハンターを偶然救う「デラウエア族の偶像」の熟練ハンター、ファイアー・フラワー (Fire Flower) は、シーラ・イーゴフ (Sheila Egoff) とジュディス・ソルトマン (Judith Saltman) らがこの時代のカナダ児童文学における先住民像について指摘するように、白人への奉仕者から、彼らの救護者としてその地位を逆転させる。<sup>(42)</sup>

次にジョンソンは先住民を自然や動物に近い存在として描くことにより、先住民の動物に対する慈悲と共生の姿勢を浮き彫りにし、動物を先住民同様、白人の下に他者として位置づけ、暴力的に扱う白人を批判する。犬の生贄を使う「野蛮な」祭りを糾弾しようとするキリスト教聖職者による祭りの視察をめぐる「ウィ・フロの生贄」 (“We-hro’s Sacrifice”) はその典型的な例である。<sup>(43)</sup> 物語は先住民の行為を蛮行として糾弾しようとする白人の視線から、祭りのために愛犬を生贄として差し出す一見残酷で非文明的な先住

民の行動を描く。しかし、ここで生贄となる犬は物語前半で、先住民の少年ウィ・フロが「乱暴な声」(“coarse voice”)とぬかるみにはまった馬を駆りたてる「とどろくような鞭の音」(“thundering whipfalls”)を聞き、「白人だ、だってインディアンはそんな言葉を使わないし、自分に仕えてくれる動物をぶったりしない」と断定し、自分のために働いてくれている動物たちに八つ当たりする白人から救った犬なのである。<sup>(44)</sup>さらに宣教師の批判対象であった先住民の犬を生贄とする祭りは、以下の引用の通り、前述の白人の動物に対する虐待の対極として、先住民の動物に対する愛情を映し出すことになる。

犬が死んだ形で運ばれてきた、そしてそれはワムバム、ピース、ヤマアラシの針毛刺繍で美しく飾りつけられていた。おお！なんと幸いそうに、苦痛なくこと切れていたことか、尊師の指で優しく首をしめられたのだ、というのは、インディアンは決して動物に無情な振る舞いをする事が無いからだ。<sup>(45)</sup>

ここに白人の動物という他者に対する暴力、先住民文化に対する無知と無理解、そして何よりもこの生贄を使った祭りが白人の視察のために行われたという皮肉が暴露され、先住民社会の異なる価値観は肯定される。

ジョンソンは、この物語の他にも「デラウエア族の偶像」や「リトル・ウルフ・ウィロー」でも無駄に動物を殺めることのない先住民を描く一方で、先住民の登場しない物語では傷ついた白鳥を剥製用に殺す白人を描くなどして、白人文明の他者への残酷さをステレオタイプ化することにより、逆に先住民の他者との共生的姿勢を描き出す。<sup>(46)</sup>先に「デラウエア族の偶像」において、先住民が白人ハンターを熊から救う例を紹介したが、ここで熊の習性を熟知する先住民はあくまで白人ハンターを救うために、陸から転覆したカヌーの上にいるハンターにアドバイスを送り、オールを使ってカヌーに襲い掛かる熊を水面下に沈めさせる。後に猟師のトールテールとして語られるこの行為は、救われた「良い銃」(“good guns”)と「素晴らしいカヌー」(“a fine canoe”)をもった白人が、自然の法則を知らずにあくまで娯楽として熊狩りをしていたことを浮き彫りにする。<sup>(47)</sup>

また『シャッグナッピ』に収められた作品中、最も直接的に白人批判を繰り広げる「リトル・ウルフ・ウィロー」も、白人の他者に対する残虐性を糾弾する。ここで主人公の祖父、往年のクリー族(the Cree)の勇士のビッグ・ウルフ・ウィロー(Big Wolf Willow)は飢えをしのぐために白人定住者の子牛を二頭殺し、銃を持った牧場主スコッティ・マッキンタイヤ(Scotty McIntyre)とノース・ウエスト騎馬警察に追われることになる。しかし、物語最後の彼の警官に対する主張は、比較にならないほど大量のバッ

ファローを先住民から奪った白人の残虐性と、それにもかかわらず白人が何ら罰せられないという不公平を浮き彫りにする。英語も白人もその法も理解しないという彼の白人批判は、インディアン寄宿学校で「英語を習得させられた」孫の口を経て次のように明らかにされる。

彼は僕にあなたにこう伝えて欲しいと言っています。白人が来て、私たちにティーピーを作るなめし皮、身につける毛皮、食用の肉、体を温めるための脂を与えてくれたバッファロー、その何百万という美しい動物をみんな盗んだ。だから彼は飢えているときに小さな子牛を二匹ぐらいいただいても、害はないと思った。彼のバッファローを全て獲ってしまった白人を逮捕して罰した者があるか、もし無いなら、どうして白人より小さな悪事をしでかして捕まったり、罰せられたりすべきだということか、と問うています。<sup>(48)</sup>

ここに見るリトル・ウルフ・ウィローの口を介した白人文化批判は、先住民としてのジョンソンが、植民地支配のもとで自らのものとなった白人の言語文化リテラシーを使いこの物語を書く像と重なる。

あからさまな白人文明批判を含みながらも、ジョンソンの作品が『ボーイズ・ワールド』に掲載され続けたのは、物語が批判の目立たないように仕立てられているからである。ここで取りあげた三つの物語はいずれも、ステレオタイプ化された白人を批判する一方で、「批判対象とならない白人」を登場させることで、全ての白人が批判対象ではないことを強調する。加えて、批判対象とならない白人が、読者である少年たちの他に、カナダの副総督、連邦政府の先住民担当の役人、騎馬警察官、大学教授、そして宣教師などの公的な地位にある人物である点は無視できない。特に本章でこれまでに取りあげた3つの物語は、物語の最後で制度側の宣教師（「デラウエア族の偶像」、「ウィ・フロの生贄」）と騎馬警察（「リトル・ウルフ・ウィロー」）に先住民の価値や主張を認めさせ、それを認めた白人の人格を讃えることで、物語の白人批判を隠蔽する。この傾向は「シャッガナピ」において学校で白人の教員や同級生から人種差別を受けるメティスの主人公に、自らの出自に誇りを持つように勇気づけるカナダ副総督や友人の爵位をもつ父、そして「『ノース・イーグル』との一夜」に登場する先住民の文化に深い理解を示すトロントの大学教授にも見られる。しかしこの行為により、ある程度リアリスティックな物語に現実では起こりがたい結果がもたらされ、物語はセンチメンタルなロマンスへと変換されてしまう。ここにジョンソンの物語の限界が存在する。

こうした批判の隠蔽工作は、白人を批判しながらも、ロイヤリストでありカナダ・ナショナリストでもあるジョンソンが、先住民がイギリス支配下のカナダの制度の中で彼らの生き方を認められた上で、共存することを望んでいることのあらわれであろう。こうした複数の忠誠はイギリスからの独立の過程にあった連邦結成から第一次世界大戦前までのカナダを生きるイギリス系/モホーク族カナダ人であったジョンソンだからこそ可能になるユニークな立場とも考えられる。

ジョンソンが単に先住民の白人社会への「同化」を目指してはいないことは、「彼の宗教と民族に誇りをもち、断じて父祖の信仰に背くことがない」ウィ・フロ、<sup>(49)</sup>そして長年寄宿学校で白人の生活様式を受け入れることを強制され、政府の先住民担当官（Government Indian Agent）の通訳となった後も、完全に白人の生活様式を受け入れることを拒否し、ジョンソンのステージ衣装を喚起する「文明と野蛮が入り混じった不思議な服」を着用し続けるリトル・ウルフ・ウィローらの例に見られるとおり、彼女の物語に登場する先住民の少年が自らの文化に強い誇りを持つ人物であることによって示唆される。<sup>(50)</sup>さらに彼女の心が先住民とともにあることは、ジョンソンが白人を悪者として描くことはあれど、先住民を悪者として描くことは皆無であることからわかる。

そして、先に取りあげた白人に制圧された先住民のイメージを喚起する、「トーテム・ポールのフルール」や「『ノース・イーグル』との一夜」に描かれる白人観光客による先住民の伝統的装具の収集行為は、ジョンソンに先住民の伝統文化の価値を理解せず、わずかな金でそれを買取ろうとする白人の骨董あさり人（“curio-hunters”）の無知と下品さを「略奪する」（“despoil”）という強い言葉を使って批判する機会を与える。<sup>(51)</sup>

また、それは同時にジョンソンに白人が先住民に対して抱くロマンを学ぶことで機転を利かせながらも伝統的な生活や文化を守ろうとする賢い先住民を描くことを可能にする。「トーテム・ポールのフルール」において、夫に先立たれたフルール（Hoolool）は、貧しい生活の中でも幼い息子テナス（Tenas）にその出自を伝えるために、トーテム・ポールを白人に売ることを拒みつづける。しかし、フルールは食料もお金もつきかけた時、息子のみた小さなトーテム・ポールの群れの夢に着想し、二人で大量にミニチュア・トーテム・ポールを作って白人に売ることを思いつき、物語の最後には成長したテナスが家を新築する程度の財をなす。

この物語は子供の夢をビジネスの媒介とすることで寓話的な感触を生み出すが、白人マーケットのニーズを的確に読み取り、商品を息子との流れ作業で量産しビジネス化する女性の成功を描く近代的な物語でもある。そして、このフルールの行動が、自らの出自の一部でもある白人オーディエンスのニーズを知り、それをある程度まで満たすことで、先住民の文化を発信しつつ、フルールのように財を成すことはなかったものの、自らの

才能で生計をたてたジョンソンの生き様と重なるのは偶然であろうか。

### むすびにかえて

モホーク族の父とイギリス系の母を持つE. ポーリーン・ジョンソンとその作品をポスト・コンフェデレーション時代、そして現在のカナダの文化ポリティクスはどこに位置づけるべきなのか。批評家による議論はリック・モンチュア (Rick Monture) の指摘のとおり今世紀も続いており、今後もコンテキストの変化に従って、その位置づけは変わり続けることが予想される。<sup>(52)</sup>しかし、本稿のこれまでの考察から『シャッグナッピ』中の物語に関しては、ジョンソンが自らを先住民として認識しながらも、そのハイブリッド・アイデンティティを自在に操ることで、白人文化に存在するステレオタイプをなぞり、北米の白人雑誌編集者とその少年読者に訴えやすい作品を創作し出版社に原稿を売り生計をたてると同時に、次世代を担う少年読者に物語を通して先住民に関するポジティブなイメージ、そして白人側への懸案事項を発信することに成功していると考えてよいであろう。

二つの文化のカナダにおける共存を望む彼女が創作する少年文学マーケット向けに単純かつパターン化され、最終的には先住民が白人の制度に歩み寄る物語が伝えるメッセージには限界も問題もある。しかし、ジョンソンは先住民の同化政策が推し進められていた時代に、米加両国を生きる白人少年が手に取りたがる物語を書くことによって彼らを「教育する」という行為に、次世代における先住民・定住者関係の健全化という希望を託したのではないか。

## 註

- (1) 詳細はマクマスター大学のホームページを参照されたい。Indigenous Studies Program, “E. Pauline Johnson: Her life, Work and Legacy Symposium,” McMaster University, <http://indigenous.mcmaster.ca/events/e.-pauline-johnson-her-life-work-and-legacy-symposium> (accessed 18 December 2013).
- (2) Canadian Broadcasting Corporation, “Margaret Atwood’s Opera about Pauline Johnson to Debut May 2014,” CBC Books, 26 July 2013, <http://www.cbc.ca/books/2013/margaret-atwoods-opera-about-pauline-johnson-to-debut-may-2014-1.html> (accessed 18 December 2013).
- (3) Margaret Atwood, *Survival: A Thematic Guide to Canadian Literature* (Toronto: House of Anansi, 1972).
- (4) E. Pauline Johnson, *The Shagganappi* (Toronto: Briggs, 1913). しばしば経済的に困窮していたジョンソンが、晩年に引退の時期と場所、生活の術となる新しい作品マーケットを模索していたことはケラーによる伝記が詳しい。本稿におけるジョンソンの伝記的情報は主として以下の文献による。Betty Keller, *Pauline: A Biography of Pauline Johnson* (Vancouver: Douglas and McIntyre, 1981). 『ボーズ・ワールド』がカナダに多くの読者を抱えていたという点に関しては、デイヴィッド・クック社 (David Cook) で同誌ならびにジョンソンが投稿していた『マザーズ・マガジン』 (*Mother’s Magazine*) 誌の編集者エリザベス・アンズリー (Elizabeth Ansley) からジョンソンへの手紙による。Elizabeth Ansley to E. Pauline Johnson, 8 November 1905, Pauline Johnson Archives, McMaster University Library.
- (5) Keller, 35.
- (6) アメリカの作家・批評家、ウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells, 1837-1920) はジョンソンの母の従兄弟である。彼は編集者としてジョンソンと同世代のカナダの詩人をアメリカの文芸誌に紹介していたことで知られるが、家族の大半が両親の結婚に反対であったためか彼女との交流は無かった。また彼女が『ハーパーズ』 (*Harper’s*) に投稿した詩「イン・ザ・シャドウ」 (“In the Shadow”) は、彼に酷評され同誌に出版されることはなかったが後にロンドンの『アシネアム』に出版された。E. Pauline Johnson, “In the Shadow,” *Athenaeum* (28 September 1889): 412; “E. Pauline Johnson,” *McMaster University Monthly* 14 (1904) : 104.
- (7) Veronica Strong-Boag and Carole Gerson, *Paddling Her Own Canoe: The Times and Texts of E. Pauline Johnson* (Toronto: University of Toronto Press, 2000), 49. チーフスウッドは現在国定史跡となり博物館として一般公開されている。Chiefswood National Historic Site, “Johnson Family,” Chiefswood National Historic Site, <http://www.chiefswood.com> (accessed 18 December 2013).
- (8) Keller, 30.
- (9) Strong-Boag and Gerson, 109-110. ジョンソンの衣装については、以下の文献も詳しい。Sabine Milz, “‘Public(c)ation’: E. Pauline Johnson’s Publishing Venues and their Contemporary Significance,” *Studies in Canadian Literature* 29, no. 1 (2004): 127-45.
- (10) Strong-Boag and Gerson, 111-16.
- (11) Rick Monture, “‘Beneath the British Flag’: Iroquois and Canadian Nationalism in the Work of Pauline Johnson and Duncan Campbell Scott,” *Essays on Canadian Writing* 83 (Fall 2004) : 125.
- (12) Judith Butler, “Performative Act and Gender Construction: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory,” *Theatre Journal* 40 (December 1988) : 519-31;

- Strong-Boag and Gerson, 112.
- (13) 1895年のジェイムス・ウェザレル (James E. Wetherell) への手紙のなかで、彼女は「わかるでしょ、みなさんから食べさせてもらっている女は年をとってはいけないのよ」(“You see when a woman depends upon the public for her bread and butter she must not get old.”)と書いているように、彼女は自らの容姿を強く意識していた。ジョンソンは、1901年12月に丹毒を患い顔に傷跡を負い髪を失った頃から濃い化粧やかつらなどを使うようになる。さらに、健康を取り戻し結果的に体重が増加した彼女は二重あごを隠すために、上向きのポーズを使うようになる。E. Pauline Johnson to J.E. Wetherell, 20 February 1895, J.E. Wetherell Papers, University of Toronto; Keller, 176-7, 229-30.
- (14) Catherine Belsey, *Critical Practice* (London: Methune, 1980), 61; Strong-Boag and Gerson, 114.
- (15) ジョンソンが白人の好む物語の研究していたことは、彼女が当時のフィクションに登場する先住民女性のステレオタイプを研究した論文「現代フィクションにおける先住民女性に関するある強固な人種的私見」(1892)や編集者アンズリーからの手紙の裏に残された、売れそうな作品に関するメモ(1907)から明らかである。Elizabeth Ansley, Verso of Letter to E. Pauline Johnson, 26 March 1907, E. Pauline Johnson Fonds, McMaster University Library; Pauline Johnson, “A Strong Race Opinion: On the Indian Girl in Modern Fiction,” *Sunday Globe*, 22 May 1892, 1.
- (16) Carole Gerson, “Reading Pauline Johnson,” *Journal of Canadian Studies* 46, no. 2 (2012) : 50; Strong-Boag and Gerson, 101.
- (17) タイトルストーリーの「シャッグナッピ」は未発表作品である。
- (18) Marjorie Pickthall, “Canadian Fiction,” *Toronto Globe* (13 June 1903), 13.
- (19) Barbara Godard, “Pickthall, Marjorie Lowry Christie,” in *Dictionary of Canadian Biography*, vol. 15, University of Toronto/ Université Laval, 2003, [http://www.biographi.ca/en/bio/pickthall\\_marjorie\\_lowry\\_christie\\_15E.html](http://www.biographi.ca/en/bio/pickthall_marjorie_lowry_christie_15E.html) (accessed 20 December 2013).
- (20) Ives Goddard, “‘I am a Red-Skin’: The Adoption of a Native-American Expression (1769-1826),” *European Review of Native American Studies* 19, no.2 (2005) : 11.
- (21) Johnson, “The Broken String,” in *Shagganappi*, 147-57.
- (22) Johnson, “The Scarlet Eye,” in *Shagganappi*, 113-22.
- (23) Johnson, “The Delaware Idol,” in *Shagganappi*, 180-90.
- (24) Ibid., 181.引用部分の原文は “their faces were paler than any paleface I ever saw before or since”。
- (25) Johnson, “The King’s Coin,” in *Shagganappi*, 40-68. リンクスへの言及は46頁。
- (26) ワムパムをリンクスにたとえる表現は以下の通り。Johnson, “Idol,” 180. Johnson, “The Little Wolf-Willow” in *Shagganappi*, 247-57.
- (27) リトル・ウルフ・ウィローをリンクスや狐にたとえる表現は249頁。フォックス・フットが腹ばいに藪をすすむ様子、およびワムパムがつばを吐く様子を蛇にたとえる表現はそれぞれの作品の46、185頁に見ることができる。
- (28) 世紀転換期の反近代主義に関しては以下の文献を参照されたい。荒木陽子、「ブリス・カーマンのマインドキュア論と19-20世紀転換期北米東海岸の時代精神」『カナダ文学研究』18 (2010) : 55-69; Jackson T.J. Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture* (New York: Pantheon, 1981).
- (29) Elizabeth A. Galway, *From Nursery Rhymes to Nationhood: Children’s Literature and the Construction of Canadian Identity* (New York: Routledge, 2008), 98.

- (30) Pauline Johnson, “The Shagganappi,” in *Shagganappi*, 11-39.
- (31) Galway, 96.
- (32) E. Pauline Johnson, “A Night with ‘North Eagle’: A Tale Founded on Fact,” in *Shagganappi*, 69-80.
- (33) *Ibid.*, 69.
- (34) *Ibid.*, 70.
- (35) *Ibid.*, 72. 原文は “What a magnificent manhood!”。
- (36) *Ibid.*, 79.
- (37) E. Pauline Johnson, “Hoolool of the Totem Poles,” in *Shagganappi*, 81-87. この物語は、『ボーイズ・ワールド』と同じ出版社が発行していた婦人雑誌『マザーズ・マガジン』に出版されたものである。
- (38) ジョンソン一家がこの行為に白人としても、先住民としても関与している点は興味深い。1895年ジョンソンは旅先のアルバータ州でスー族のチーフから戦利品の頭皮を値切って購入している。一方で、ジョンソンの祖父は現在はスミソニアン博物館に所蔵されているイロコイ族の儀式の書の写しを白人に安価で売却したが、それは後に高額で転売された。Keller, 109-111; Strong-Boag and Gerson, 41.
- (39) E. Pauline Johnson, “The Brotherhood,” in *Shagganappi*, 212-20; “The Shadow Trail,” in *Shagganappi*, 230-37.
- (40) 主流社会側の批評家たちが、ジョンソン作品の読み方をコントロールすることでジョンソンを安全な先住民詩人として表象していたことは、以下の論文に詳しい。Mary Elizabeth Leighton, “Performing Pauline Johnson: Representations of ‘the Indian Poetess’ in the Periodical Press, 1892-95,” *Essays on Canadian Writing* 65 (Fall 1998) :141-64.
- (41) Keller, 150; Strong-Boag and Gerson, 66-67.
- (42) Shiela Egoff and Judith Saltman, *The New Republic of Childhood: A Critical Guide to Canadian Children’s Literature in English* (Toronto: Oxford University Press, 1990), 13.
- (43) E. Pauline Johnson, “We-hro’s Sacrifice,” in *Shagganappi*, 96-102.
- (44) *Ibid.*, 98. ウィ・フロのコメントは原文では “a white man, for no Indian used such language, no Indian beat an animal that served him” である。
- (45) *Ibid.*, 101-102. 原文は次のとおり。 “[T]here was a dog carried in dead, and beautifully decorated with wampum, beads and porcupine embroidery. Oh! so mercifully dead and out of pain, gently strangled by reverent fingers, for an Indian is never unkind to an animal.”
- (46) 白鳥殺しの例は以下の作品より。E. Pauline Johnson, “The Whistling Swans,” in *Shagganappi*, 169-79.
- (47) Johnson, “Idol,” 181.
- (48) Johnson, “Wolf-Willow,” 256-57. 原文は以下の通り。 “He says for me to tell you that the white men came and stole all our buffaloes, the millions of beautiful animals that supplied us with hides to make our tepees, furs to dress in, meat to eat, fat to keep us warm; so he thought it no harm to take two small calves when he was hungry.”
- (49) Johnson, “We-hro,” 96. 原文は “with the pride of his religion and his race, would not have turned from the faith of his fathers for all the world”。
- (50) Johnson, “Wolf-Willow,” 252. 原文は “a strange mixture of civilized and savage clothes”。
- (51) Johnson, “Hoolool,” 181.
- (52) Monture, 138.